

愚者

百喻経卷の第四に「比種田喻」というのがある。有名な喩である。

「昔野人あり田里に来至す……一人の百姓が他処の田を見に行つた。ところが麦が作つてあるが、大変によくできて茂っている。そこで、その田の持主に、どうすれば、こうもよくできるかと問うてみると、その主は答えた、『それは先ず、田をよく耕して土を小さくし、柔らかにして後よく地面をならすことが第一だ、それに、しかじかの肥料をやつて、種を下したらよい』と教えた。そこで愚かな男は、帰つて来て、その通りを実行しはじめたが、さて種を播くに當つて困つたことができた。こうもきれいな田にならした田地の上を踏まねば播かれない。それは惜しいことだ。地を踏み固めたら麦が出来ない。しかしその土地を歩かないでは播かれない。考えぬいたあげく一つの籠を造り四人の男にこれを輿かかして種を播いた。そこで自分の二本の足は土を踏まないですんだが、そのかわりに大男の八本の足が踏みかためたために土地は大変固くなつた。世の人たちは、その男の愚かさを笑つたが、その人は知らない……」というのである。

八本の足

われ等は悲しくもこの喩を笑えない。それはあまりに、八本の足によつて踏みたたいて行く、いらぬことが多いが故である。

静かに自分の生き方について考えようではないか、二本の足跡をつけることを恐れて八本の足跡をつけてきたことの多いこと、この愚かな男の有様は、そのまま自分ではないであろうか。

書齋に入つて見る。いらぬ書物で埋つてはいないか。いらぬ勉強で時を費し通したのではないか。

ある会社に、大変な勉強家があつた、彼は独学で今日の地位を獲た。彼は勉強をやめない。しかし彼が勉強すればするほど、皆の者と仲が悪くて、その男を中心に、その会社の内部には風波が絶えない。これでは彼のしていることは、勉強ではなくて「いらぬこと」であつたのだ。

人に敗けまい、他に勝れようとの勝他の心、名聞の心でしたことは、いらぬことに属する、時に自分だけが、自己をあやまるのみならず、百世に人をあやまらす大原因とさえなる。かの口伝鈔第九章の「法師には三の髻あり、いわゆる勝地、利養、名聞これなり。この三箇年があいだ源空が述ぶる所の法門を記しあつめて隨身す、本国に下りて人を虐げんとす、これ勝他にあらずや、それにつけて善き学生といわれんと思ふ。これ名聞をねがう所なり、よりて檀越をのぞむこと所詮利養のためなり、云々」

これは法然上人の聖光房に対するお叱りである。「終に仰せをさしおきて口伝に背きたる諸行往生の自義を骨張して、自障障他すること、祖師の遺訓を忘れ、諸天の冥慮を憚らざるにやと覚ゆ、悲しむべし畏るべし。」小賢しい才智によつて、三つの髻を

知らず、いらぬ勉強によつて、自損損他するもの、決して聖光房だけではあるまい。悲しむべし。畏るべし。

「いまの世には、学問して人の謗をやめん、ひとへに論義問答旨とせんと、かまえられ候うにや、学問せばいよいよ如来のご本意を知り、悲願の広大の旨をも存知して、いやしからん身にて往生はいかがななど危ぶまん人にも、本願には善悪浄穢なきおもむきを説き聞かせられ候わばこそ学生の甲斐にても候らわめ……」（歎異鈔）

仏教を学んでいよいよ大悲本願に遠ざかり、「評論のところにはもろもろの煩惱おこる。智者遠離すべきよしの証文」を忘れて、傲慢の種とするものは、学んだというものでなく、「いらぬこと」をしたのである。八本の足で福田を荒したのである。

田

仏法においては、父母を恩田といい、仏法を福田という。父母なければ、所生の縁なく、その恩養なくば今日の我はないが故である。そして、仏法僧の三宝のおかげによつて、今日のこの信心歡喜を獲、幸福を獲、生死を解脱するの福智蔵を得るもの、みな三宝のおかげであるが故に、これを福田と言うのである。

しかるに、五逆誹謗正法の悪衆生は、父を殺し、母を殺して恩田に背き、阿羅漢即ち聖者を殺し、仏身より血を流し、和合僧を破る等によつて、福田にそむく者である。「善知識をおろかに思い、師をそしる者をば謗法の者と申すなり。」五逆罪とは、恩田、福田に反逆するものことである。八本の足によつて恩田、福田を蹂躪するものである。

恩田福田には合掌によつて入るべきである。我慢の下駄ばきのまま、家に入り、寺に入つて、夫を、子を、妻を、祖先を、そしてついに久遠の本仏を足げにかけて、無慚無愧なること、恐るべし、恐るべし。仏の智慧光によつて、わが相を内観し、慚愧合掌して恩田福田に帰すべきである。

二本の足

二本の足、朝から晩まで、一日として、この二本の足を使わないですむ日はない。したがつて、二本の足の足跡をつけないですむ日はない。生れてから死ぬるまで、この二本の足のつけたあと、歩いたあと、どこをすぎたか、どこにいるか、どこへ行こうとするか。そしてどんな跡をつけたのか。厳肅に考えた時、凝視した時、何がその内省のうちに生れてくるだろうか。

どうしても使わずには生きられない足、足あとをつけないでは種を播かれない田、二本の足をおそれて危ぶめば、八本の足跡のつく人生という田であることを思う時、どうにかせねばならない。どうにかせねば生きられない。必然の問題がそこにおこつてくる。

両足尊

み仏のことを両足尊という。

法華玄賛には、

「仏は、二足、多足、無足の一切中において尊しとす。今両足尊と云うは、三類中において両足を尊しと為す、能く道に入るが故に、謂く人天の類なり。仏また両足なるが故に両足尊と言う。」
とある。であるから両足とは、両足、多足、無足の三類中で先ず一番尊いということである。何故に尊いかといえば、「能入道故」能く道に入るが故である。まこと蛇や百足が孝を知り、慈悲を行ずるということはない。仏は、その両足中の最尊なるが故に、両足尊といわれるのである。しかれば、何故に両足尊といわれるのであるか。

『法華嘉詳疏』には、

「両足尊とは、あるいは戒定をもって二足となし、あるいは権実をもって二足となし、あるいは福慧をもって二足となす。これみな内徳の二足なり。外形には天と人とをもって二足と為す。仏はこれ天と人との二足の尊なり。」

とある。すると、仏が両足尊といわれたまうのは、戒(正しい生活)定(正しい心)の二足があるためであり、あるいは、仏たる証の徳(実徳)と衆生済度の方便の徳(権徳)があるためであり、福慧として、絶対の幸福と、智慧の光とがあるためであり、あるいは又大法の領解と修行成就の足があるためである。しかれば、これらはすべて仏の「内徳之二足」のことであつて、外の形をいうのではなかつた。ここにおいて真実の足をつけるとは、内に徳を成就することである。内に徳を成就することより外に、足の問題の解決はなかつたのである。

念仏道

われら衆生は、仏のような尊い内徳の足を持たぬものである。とりわけて五濁の凡愚たるわれらは、おそれても、謹んでも、悪業のために引きまわされて、六道輪廻、とくに、三塗(地獄、餓鬼、畜生の三つのみち)に走りこもうとするものである。しかるに、有り難くも如来の大悲本願は、われらに六字の足、大行の足を廻向し、本願の白道をほそぼそながら歩むようにして下さつた。み教えを聞きつつ、釈迦弥陀二尊の教命に信順して、念仏申すようにして下さつたことは、何という有り難いことであるか。

一道

ただ、専ら一道を歩ませて頂かなくてはならない。もし、念仏一道を凝視して生きることを忘れた時、八本の足が人生を踏み固め、蹂躪ついてもわからないであろう。念仏の足跡、求道の足跡、信心歓喜の足跡がなくなる時、もう「いらぬこと」に本気になつて、自損損他の八本の自力の足跡が乱れついている。はつきりと念仏道を、教えのままに歩ませて頂く時、穢い煩惱の足跡さえ浄化せられるであろう。まことに念仏すべきである。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」(歎異鈔)